

尾崎地区の歴史文化遺産一覧(1)

※視点番号は252頁を参照。

No.	名称	もの場	こと	地域の歴史文化の視点	赤穂を代表する歴史文化						解説	
					1	2	3	4	5	6		
1	木造千手観音坐像	◎		9								平安時代弘仁期(810~824年)の惠辯僧の作とされ、京都の高麗山神護寺に祀られていたが、応仁の乱など幾多の兵火をのりて普門寺に遷すと伝わる。十一面千手観音の坐像としては県下唯一のもので、昭和15(1940)年に旧国宝、昭和25(1950)年の文化財保護法制定により国の重要有形文化財に指定された。
2	木造不動明王立像(光背を含む)	◎		10								像高106cmで、一木調成、背割りを施す。両手は肩部で閉じ、頂蓮は前半を欠き、右手首より先は失われ、両足先は虫食いのためひどく損じている。光背の修理墨書銘によれば、木像は慈覺大師(円仁)の作と伝え、もと赤穂郡周世郷の高麗山神護寺清菴院護摩堂の本尊であったが、現在は如来寺で保管されている。平安時代後期の木像として市指定有形文化財となっている。
3	木造毘沙門天立像	◎		10								木造不動明王立像と同様の経絡を持ち、平安時代末期の製作とされる。市指定。
4	三昧の迎え地藏	●		9								尾崎共同墓地内にある像高105cmの丸彫り坐像で、元文2(1737)年の造立。かつては木ノ下の元三昧にあったが、三昧の移転により現在地に移された。
5	迎え地藏	●		9								尾崎共同墓地内にある像高62cmの丸彫り坐像で、安永10(1781)年の造立。
6	子守地藏	●		9								旧赤穂大橋東詰めの祠内にある像高65cmの丸彫り坐像。川遊びで毎年のように子どもが死んでいたため、昭和23(1948)年に建立された。
7	六地藏(田尾)	●		9								清水の元三昧跡にある像高55cm前後の六地藏。自然石を含み、欠損が多いが、一般的な六地藏の形態ではない。
8	地藏(田尾)	●		9								清水の元三昧跡内に2体の地藏菩薩像があり、像高98cmの丸彫り坐像と、像高28cmの頭部が欠損した坐像がある。後者は寛保2(1742)年の造立。
9	石指の首無し地藏	●		9								石指にある像高59cmの丸彫り立像。隣接して一石五輪塔もある。
10	首無し地藏	●		9								石指にある像高37cmの丸彫り坐像。頭部がコンクリートで補修されている。
11	小坂の地藏	●		9								小坂の地藏堂内に安置された像高62cmの丸彫り坐像。明治26(1893)年に造立された。
12	三本松と俱舎塔	●		9 10								医師尾崎玄度が、その先祖である尾崎伊賀守政頼らの墓を整備し、寛政7(1795)年に建てたものである。右・左・裏の3面にはその由来が記されている。上部は丸彫り坐像。
13	信仰の道石碑	●		9								赤穂八幡宮の脇から如来寺や普門寺へとつながる道沿いにある高さ192cmの石碑で、昭和50(1975)年に建立された。
14	尾崎村道路元標	●		9 27								昭和12(1937)年5月に赤穂大橋が完成するまで、旧赤穂大橋東詰に建つ石標は尾崎村への玄関口を示し、高さ65cm、25cm角の花崗岩で、正面に「尾崎村道路元標」背面に「兵庫縣」と刻んでいる。
15	田淵丹仙句碑	●		9								江戸期における赤穂俳諧の証として、また庶民文学のさきがけとして寛政3(1791)年に建立された文学碑。
16	児島長年碑	●		9								赤穂における唯一の勤皇志士の碑で明治21(1888)年に建立された。
17	俊恵師之碑	●		9								明治29(1896)年、近江国百姓久次郎(のち慶心の八世の孫、松居久右衛門が拾得金の美徳を知り、後世に伝えんと建立した。
18	芭蕉早苗塚	●		9								俳聖松尾芭蕉を偲びつつ門下生の広瀬惟然、井上寒瓜の遺徳を讃えたもので、天明8(1788)年に尾崎在任の柳田寒桃がこれを建てた。
19	塩竈神社社殿改築記念碑	●		9 30								大正6(1917)年、塩竈神社の改築記念碑として建立。
20	忠魂碑	●		9								当初は日露戦争による戦死者8名を合祀するため、寺山に大正10(1921)年4月に建立していたのが、昭和10(1935)年、現在地に移転した。なお、現在は第二次世界大戦の戦死者も合祀している。
21	鱗介碑	●		9								捕獲した幾億兆の魚族を弔う石碑で、昭和3(1928)年の建立。
22	惜椋碑	●		9								昭和26(1951)年、次男の戦死を悼み父・桃井健三が鎮魂碑を建立したものである。
23	大石内蔵助ゆかりのハゼ	●		9 10								延宝元(1673)年、大石内蔵助良雄の元服を祝って芸州(広島県)からハゼを取り寄せたと伝わり、かつては尾崎川(現在の千種川)の堤防にあったという。大正11(1922)年、堤防の改修に伴って赤穂八幡宮境内に移築され、昭和31(1956)年に由緒碑が建てられた。
24	おせどの牛石・馬石	●		9 10								おせどは、元禄14(1701)年の刃傷事件の後、大石内蔵助が城明け渡しの残務整理のため6月25日まで仮住まいしたと伝えられる。池のほとりに二つの石があり、池に向かって右側は牛がうつ伏したような形の牛石、左側は馬が立ったような馬石とされ、かつて赤穂城内にあったとされている。
25	尾崎・大塚古墳(付)出土遺物12点及び『宇大塚古墳調査書類綴』	◎		34								瀬戸内海に面した向山の南にのびる尾根上に独立して立地する。6世紀後半から7世紀に築かれた直径約20mの円墳で、両袖式の横穴式石室をもつ。須恵器のほか耳環が出土しており、明治41(1908)年に地元有志によって発掘され、その調査結果は「宇大塚古墳調査書類綴」として記録されている。市指定。
26	猪壺谷遺跡	●		34								尾崎字猪壺谷にあり、縄文時代の土器や石鏝、弥生時代のサヌカイ製の打製小型挟入り石包丁などが出土採集されている。
27	大塚遺跡	●		34								3点の縄文時代の石鏝が採集されたほか、発掘調査によって古墳時代、中世の土器類が出土しているが、遺構は見つかっていない。
28	赤穂大橋下遺跡	●		34								昭和35(1960)年に赤穂大橋の橋脚補強工事に伴って約3,500年前の縄文土器、約2,000年前の弥生土器、須恵器、石鏝などが見つかった。
29	赤穂八幡宮(尾崎)	●		9 10 30 32 33								祭神は応神天皇、神功皇后、仲哀天皇であり、応永13(1406)年鳥撫村(現在の薦和)銭戸島から移されたと伝わる(『播州赤穂郡志』では慶長10(1605)年に移すとある)。江戸時代には天台宗の神仏習合寺で神宮寺と称したが、明治政府の神仏分離令で八幡神社と改称し、戦後は現在の八幡宮となった。氏子域は千種川河口部一帯であり、御旅所に宝輪神社がある。同宮には大石内蔵助ゆかりの布袋額、ハゼの木・石灯籠などをはじめ、赤穂義士関係の書状などが数多く残されている。
30	如来寺	●		9 10								赤穂八幡宮の神宮寺であったが、神仏分離して仏道を観音寺に移し、寺号を金光山如来寺に改め、天台宗に属した。本尊は阿彌陀如来。寺内に薬師堂のほか、俊恵師之碑・岡田弥兵衛墓・早苗塚などの石碑、昭和12(1937)年造立の地藏菩薩像などの石仏が建つ。寺宝として、神宮寺時代に可笑(大石良雄)画をはじめ、赤穂義士ゆかりの書簡などが残る。
31	塩竈神社(尾崎)	●		9 10 30								かつて東浜塩田に祀られていたが、大正6(1917)年頃に現在地に移され、その後金毘羅神社と天神社が合祀。通称「金毘羅さんの社」。
32	宝崎神社	●		9 10								赤穂八幡宮大祭の御旅所。境内にはノット岩と呼ばれる自然岩盤が露頭しており、神功皇后がここで祝詞を唱え台風がおさまったことから「ノット岩」と呼ばれると伝わる。
33	普門寺	●		9								寺縁起によると古来は権蔵台山にあり、慈覺大師の創建といわれている。慶長2(1597)年、明王山普門寺は赤穂東組(橋本町)、大高山長安寺は赤穂西組(新町)に再建された。昭和32(1957)年、加里屋の区画整理事業により現在地に移築され、両寺が相合して明王山普門寺と改称された。本尊に国指定有形文化財の木造千手観音坐像があるほか、六地藏をはじめとした地藏菩薩像が境内に安置されている。地藏菩薩像には文化2(1805)年造立の丸彫り立像、明治16(1883)年造立の丸彫り半跏像などがある。
34	宝専寺	●		9 10								かつて真言密教の靈場としてカサガの山(寺山)にあったが、戦国時代には衰退して龍王山専福寺と龍馬山観音寺の2ヶ寺だけが残っていた。天文5(1536)年、専福寺住職正善が浄土真宗に改宗し、寺号を宝専寺に、名も正空と改め、現在地に堂宇を移した。山号は龍王山。寛文年間(1661~1672年)には、本願寺より一寺二住職の免許を得て、東院と西院が1年交代制で寺務を行うようになった。一寺二住職の寺は、全国でも珍しい。
35	太地堂	●		9								普門寺の向いにあり、昭和4(1929)年に建築された。大師像、延命地藏、子育て地藏、聖徳太子像が祀られており、聖徳太子の「太」と地藏の「地」とをとりて堂の名としたと伝わる。享保年間(1716~1736)造立の丸彫り坐像、「本尊千手観音」「八十一番」と記載のある弘法大師像などが安置されている。
36	川馬の大師堂	●		9								弘法大師像、地藏菩薩像が2体ずつ祀られている。
37	おせど牛馬石	◎		9 10								元禄14(1701)年の刃傷事件後、城明け渡しの残務整理をする5月7日から6月25日の間、大石内蔵助とその家族が仮住まいしたところとして伝えられ「おせど」の俗称で親しまれている。現在は、瓢箪池や、内蔵助が祀ったとされる荷箱社、

尾崎地区の歴史文化遺産一覧(2)

※視点番号は252頁を参照。

No.	名称	もの場	地域	赤穂を代表する歴史文化						解説
				1	2	3	4	5	6	
38	ノット岩	●	9 10 32	●	●					宝崎神社の境内にある長さ約15m、高さ約1.7mほどの低く平らな溶結凝灰岩質の流紋岩で、赤穂八幡宮の秋祭りでは御旅所となり、神輿がこの岩の上に着座する。この岩については、次のような伝承が伝わる。神功皇后が三韓征伐の帰りに海が台風で大荒れになり、難破寸前の時、近くにあったこの岩に船を繋ぎ、波の静まるのを願って祝詞を唱えたところ、たちまち波は静まり、船を進めることができたという。そのためこの岩を「のりとの岩・ノット」というようになった。
39	弁慶のとめ岩	●	35		●					県道坂城・御崎・加里屋線の丸山付近にある。かつて山頂からこの大石が転がり落ち、一人の村人が下敷きになろうとしたその瞬間、ちょうど通りかかった弁慶がこの岩を支え止め、村人を救ったという。(赤穂の昔話)
40	尾崎・坂越山論石屋	●			●	●				元禄8(1595)年、尾崎村の者が坂越浦の南側、「丸山」と呼ばれる場所を刈っているのを届けが坂越村に入ったことを発端として、坂越村は赤穂藩へ吟味願いを提出、訴訟となった。この争いは14年間も続き、文化8(1809)年によく和解が成立し、両村の境界線が石屋によって築かれた。江戸時代には、山林を所有する村がそこから薪や肥料にする木材や落ち葉を調達できたため、このような争いが起きた。
41	旧尾崎村	●	30 32		●					官山の麓、赤穂八幡宮の周辺に形成された、塩田を主な生業としたまち。かつての千種川が運んだ自然堤防上に築かれ、海側は塩田で占められていた。
42	尾崎尋常高等小学校跡地	●	9		●					明治40(1907)年、尋常小学校が高等科を併合して尋常高等小学校に移行し、修学年限が4年から6年に延長された。小学校名は、昭和16(1941)年に国民学校と改称されるまで続き、学校地としては明治32(1899)年から昭和10(1935)年まで存在した。
43	今井学校跡地	●	9		●					明治期の尾崎は、幼い頃から製塩労働に携わる者がほとんどで、多くの子は不就学で終わることを憂いた今井三造が、明治34(1901)年に私財を投じて私立今井学校を開校。尾崎尋常小学校に二部教授の夜間授業が行われるようになり、明治35(1902)年10月開校となった。
44	中川家住宅	●	9		●					明治末期の建築と推定される。入母屋平入の屋根、建物と一体となった塀など屋敷型住宅の外観をもち、隣接する赤穂八幡宮と一体となり地区の景観を形成している。平成10(1998)年に赤穂市の市街地景観重要建築物に指定。
45	仙桃園(桃井家住宅)	●	9		●					素封家小川伝次郎が明治27(1894)年に画師の北条文信に庭園設計を依頼し、旧山陽道有年宿駅の柳原家の本陣御座所を書院として移築するなど、別邸として整えられて紅蔭園と称した。庭園中腹には、大正10(1921)年、2階建ての茶室も増築したが、昭和22(1947)年桃井氏に譲渡され、仙桃園と改称された。この庭園は、明治時代中期に作られた赤穂地方の数少ない庭園として貴重なものである。
46	水尾跡	●	9 10 27 30	●	●	●				塩田に海水を導き入れる水路を「みお」と呼び、尾崎のまちを歩くとその名残を見ることができる。
47	旧赤穂大橋跡	●	9 27 34		●	●				明治25(1892)年に赤穂を襲った未曾有の大洪水で橋が流失したため、旧赤穂大橋が明治28(1895)年に完成した。二つの橋からなり、ほぼ中央より尾崎側を蔵津橋、赤穂側を赤穂橋と呼んでいた。その後は、千種川に旧赤穂大橋の橋脚が昭和35(1960)年頃まで建っていたが、今はなく架橋にその名残をとどめている。
48	海水浴場	●			●					御崎から尾崎にかけて3つの海水浴場があり、潮干狩りなども楽しめる。
49	オートキャンプ場	●	13		●					兵庫県立赤穂海浜公園に隣接した施設で、西日本最大級のうたうオートキャンプ場。
50	たでのは美術館	●			●	●				江戸時代の歌川派の浮世絵をはじめ、平塚運一、棟方志功、竹久夢二など主として昭和期に活躍した版画家の作品を多数収蔵、展示している。平成17(2005)年に加里屋のお城通りに開館したが3年後に閉館。その後、平成24(2012)年から尾崎地区で運営されている。
51	赤穂八幡宮獅子舞	◎	9 10 33						●	赤穂八幡宮獅子舞は、寛文元(1661)年の赤穂城完成を祝って始まったとされ、「神幸式」の行列の露礼を務める。囃子がなく、太鼓の打ち出しのみで鼻高に導かれた雌雄の獅子が、境内及びお旅所までの道中を清めながら荒々しく舞う。平成5(1993)年に市指定、平成17(2005)年に兵庫県無形民俗文化財に指定された。
52	赤穂宝専寺恵比寿大黒舞	◎	9 10 33						●	江戸時代中頃からはじまり、塩田で働く人々の間に受け継がれてきた芸能で、毎年正月に家々を廻ってホギヅ(祝言など)を述べ、祝儀を受けていた門付祭文の芸を伝えたものである。舞は、恵比寿および大黒の面をかぶり、恵比寿は大きな鯛をかかえ、大黒は小づちを手にして相対し、極めて大ぶりな身ごなして舞う。昭和47(1972)年に兵庫県無形民俗文化財に指定された。
53	赤穂八幡宮神幸式の頭人行列(付)祭礼次第等文書 75点	◎	9 10 33		●	●			●	赤穂八幡宮の頭人行列の歴史の詳細は定かではないが、寛文元(1648)年にはすでに頭人の記録が残されている。明治34(1901)年の衣裳・諸道具の購入記事から、少なくとも近代以降、現在に至るまでほぼ同様の行列が保たれていると推測される。祭礼次第等文書と合わせて、市指定文化財となっている。
54	赤穂浜鶴き唄	◎	9 30			●				浜鶴き唄は塩田作業のひとつで、海水の上昇を促すため牛鞆・鉄万願などで固くなった地盤を踏み回ることであり、その際に浜男たちによって唄われていた作業唄が「浜鶴き唄」である。現在は保存会が結成され、採譜された浜鶴き唄を民謡風にアレンジして新唄とし、尺八や三味線等も加わって当時のものとは異なっているが、元来の浜鶴き唄もあわせて伝承されている。市指定。
55	尾崎のまちなみ	●	9 10 30		●	●				尾崎は東浜塩田従事者のまちであり、千種川の自然堤防にあたる赤穂八幡宮周辺に人々が集住し、周囲は塩田として開発された。自然堤防上のまちは当時の海岸線に沿って道ができていたと思われ、曲線を描く道と細い路地が特徴である。特に幅1mにも満たない路地が多くみられる。
56	三本松	●	9 10		●					地名。赤松氏の末裔である尾崎伊賀守政頼が、この地に居住したため一帯の地名が「尾崎」になったと伝える。政頼の死後、生前の愛木であった松が3本植えられたのでこの地を「三本松」と呼んだ。
57	宮山	●	9 10		●				●	地名。赤穂八幡宮の鎮座地。「みややま」が語まって「みやま」という。
58	猪壺谷	●	35		●					地名。縄文・弥生時代の石器・土器の出土する地。谷間の平地で塩を作っている人を見た逸話が残る。(赤穂の昔話)
59	向山	●	35		●					地名。集落の向井にある山。大蛇が出てきた昔話が残る。(赤穂の昔話)
60	川馬	●	36		●	●				川端と馬場町の頭文字をとったもの。
61	磯釜	●	36		●	●				磯ノ橋と釜屋本町の頭文字をとったもの。
62	明神木	●	36		●				●	地名。応神天皇が筑紫から帰途、船つなぎしたと伝える。その後小社をつくる。